

「No Museum, No Life? — これからの美術館事典
国立美術館「レクシオン」による展覧会」展

会期 二〇一五年六月十六日—九月十三日 会場 美術館 企画展ギャラリー「二階」

残すことはひらくこと

有元利彦

Handling (取り扱い)

Hanging (吊るす)

Haptic (触覚的)

今回の企画展「これからの美術館事典」での「H」のキーワードのうち、この「H」が美術展設営業者としての私のスタンダードな仕事の範疇だ。

具体的には、作品や展示のプランを受け取り、空間の仕上がりイメージを作家、学芸員の方々と共有して、それを実現するための展示方法や空間の構造を検討提案。その後、展覧会場設営から作品設置までのお手伝いをさせていただくという流れだ。

しかしながら、この美術館事典の「H」の意味は時代と共に日々拡張し続けていると感じている。絵画や彫刻など、作家自らが手でものづくりをするのが当然だった時代を経て、映像やインスタレーション作品など、メディアの多様化によって、作品制作や展示を作家単独では賄えないことは、もはや当たり前のこととなった。

表現方法や素材、見せ方がこれまでに無かったものであるため、既存の美術展示の範疇からは外れてしまうようなそれらのことについて、「近くに「方法」を尋ねる人」として我々のような美術展設営業者がいる。

私たち業者に求められるのは、作家、学芸員の方々が表現したいことを理解し、それを忠実に再現することだ。しかし、その技術や意識、表現力は教えられて簡単に身につくものではなく、共有や伝達が非常に難しい。これまで自分が体験してきたことや、先

人に与えてもらった無形の財を、どんなかたちで伝えていけるのか？目で見て覚えるというような時間の流れ方ではなくなくなってしまっている今だからこそ、加速する時代に添った伝える手段をみつけ、意識を共有できる後継者を増やすことがここ数年の課題の一つだった。

「ホホキ」の仕事

先述の課題に対する答え探しと、再展示のための資料づくりを目的として昨年「ホホキ」という業務を始めた。「ホホキ」とは「保存」「保管」「記録」の頭文字を並べた略称だ。

主に美術館やギャラリーの方々に協力いただきながら、展覧会の搬入から開梱、展示の一部始終を動画で記録し、データ保存している。これまでのような写真とテキストで構成されたインスタレーションはもちろん重要で必須だが、設営中に作家が発した言葉、職人の手元の動きや生の声など、設営現場でリアルタイムに収録された情報は、その時のその場の空気まで丸ごと記録されるという意味でも重要なと感じている。

また、昨年は自分がこれまで関わらせていただいた美術館に赴き、お話を伺ってまわった。それはたとえ断片的でも現状を把握するうえで有効で、あらためて我々美術展設営業者としての「ホホキ」活動の方向性と立場を客観的にとらえ直す機会となった。そして、恥を忍んでここに記すと、美術館がただ単に展覧会を見せる場であるだけでなく研究機関であり、「調査・研究」をして作品や資料を「収集・保管」、それをもとに「教育・展示」を行う場であるという理念について私はこの旅で初めて知った。これまでに「美術館は見せる場」であって、「残す場」という意識はもっていなかった。

ではこの理念をふまえてあらためて我々に求められることは何かに立ち返ると、やはり、作家がやりたいことを100%として感じとって、120%ではなく、もちろん90%でもなく、100%として仕事することだ。

それを可能にする条件はいたってシンプルで左記の通りだと思う。

① 作家がいること

② 作品を理解した学芸員、研究者がいること

現代美術はその再現が単純ではなく、メディアの種類や、扱われる素材によって展示作業の方法をその都度検討しなければならないが、先述の条件が満たされない場合、それが、やや、難しい。

ではそのような時、作品として成立させるために「残すべきことは何か？」具体的に示

された「マニュアル」をつくるのがひとつ、方法としてあるのではないかと思いついた。マニュアルのマニュアル

作品を残すためのマニュアルづくり。

これは単純な解のようでいて、実に重要なアイデアだったと思う。

皆それぞれ、「残すこと」については重用視しつつも、明確な方法論を持ち合わせていないか、意識はしていても、そこに十分な予算と時間をさけない現状がある。ならばテストケースを作ろうと考えていたところにお話をいただいたのが「作品のマニュアルのマニュアル」というトーク企画だった。これは東京都現代美術館の開館20周年企画の環境で、芸術支援システム「ARTISTS' GUILD」が開催したプログラムのひとつだ。「作品を伝える」という目的を共有する作家や学芸員、技術者が、作品の「記録」や「再展示」にあたって重要となる要素を話し合い、時代に応じた作品の維持や展示の指針となるマニュアルのたたき台を九十分のセッションの中で作成した。「図1」

中身についての言及はまた別の機会にするとして、この具体的マニュアルができたところで、ここからはアイデアを実行していく段階に入っている。

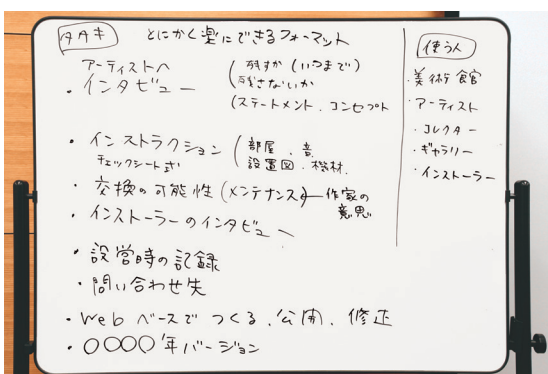


図1 2015年2月22日 於：東京都現代美術館 開館20周年トークセッション「作品のマニュアルのマニュアル」

わたし自身、「残すこと」を意識できていなかった時と、今とでは、明らかに制作設定に

対する考え方が更新された。作品納品後、

その先どんな人がその作品に関わろうとも最低限のトラブルシューティングができるよう、指示書への記載事項を注意深く検討するようになった。特に、作品を構成する機

材やシステムなど、時代によって進化し続け、廃盤になってしまふような類いのものについて

抑えるべき点」を作家に確認し、リスクに備える。場合によっては、その機材や部品

を購入してストックもする。「図2」

こうして、意識を持って作家や学芸員の方々と関わって、はじめてみえてくるものがある。そこに共通することを言葉や映

像、実際の作業に落とし込み、適当なやり方を一つでも多く発見していきたい。

残すことはひらくこと

このようなことは、そもそも欧米の美術館では盛んに取り組まれてきたことで、美術を専門に学ばれた方であれば既知のことかもしれない。しかしながら、それをそのまま日本にあてはめていくことは、全てが正解ではないと思う。

欧米がそうであるように、日本にも文化は残ってきたわけで、欧米の美術館でのマニュアル、残し方、あり方を習いつつも、日本独自の継承のかたちからも着想を得て、柔軟に日本的残し方を考えることが、これからの美術館にとって重要なことと感じている。

今回の企画展で私は、既存の美術館のVTONから、この先も必要なことがどう抽出されて更新されるのかに注目したい。

展示では、アーカイブ資料や、「免震台」「展示フック」のようなアイテムも登場する。私は「Handling」のセッションで、設営の記録映像を展示させていた。このように、本来表には見えなかった展示周辺の情報が開示され、A to Zとして作品と並列に並ぶことで、鑑賞者にもまた新たな視点が芽生え、これからの多様な美術館のあり方が発見されるきっかけになることを、わたしは期待している。(HIGUCHI-15cas 代表)

後記 展覧会、あるいは美術館という場の条件。来場者にとってそんなことはどうでもよく、ただ単に「名品」を見たいという声もあるだろう。しかし「名品」もまた、ある条件にもとづいて生みだされるものだとしたら――。田中功起さんの言う通り、展覧会は実は企画者の「態度」を表してしまう。学芸員はそれを有元利彦さんのような美術展設営業者らとともに作る。彼らは私たちの意図を汲みつつ、しかしなにより作家の意図の実現に注力する。展覧会は複雑なネットワークによってできている。本展の主眼は、この見えない網の目を解きほぐし可視化させることだ。ここであなたは受動的な「お客さん」ではない。アクター(行為主体)のひとりだ。(美術課研究員 榊田倫広)



図2 廃盤になってしまった機材。しかし、作家にとっては作品を成り立たせる重要な要素である。